

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学报 第223号 2010年3月23日

OCHADAI GAZETTE Spring, 2010



それぞれが拓く新たな試み 実を結ぶ学生のアクティビティ

CONTENTS TOPICS

- | | | |
|--|---|--|
| 第2回アフガニスタン復興支援
国際シンポジウムを開催 | 1 | ・藤田彩さん、芦川博美さんが
「第7回 航空機による学生無重力実験コンテスト」に採択
・能見祐理さんが、第19回日本メイラード学会にて
若手研究者奨励賞を受賞 |
| 「現代GPシンポジウム
キャリア教育の今、そしてこれから…」を開催 | 2 | |
| 学生のアクティビティ | 3 | 教員紹介 |
| ・お茶の水女子大学桜蔭会研究奨励賞
受賞者による研究発表会を開催 | | Laure Schwartz-Arenales 先生
(大学院人間文化創成科学研究科文化科学系) |
| ・国際シンポジウム
「学生の目から見た教育
～大学が育てる新しいリーダーシップ～」を開催 | | キャンパス点描 |
| ・徽音祭
「JOIN ∞ ACTION ～ Girls be ambitious! ～」 | | 9 |
| ・学内でハイチ大地震支援プロジェクトを実施 | | ・「Faculty Development のための教育・研究・サービス活動業績
記録 (アカデミック・ポートフォリオ) の作成術」セミナーを開催 |
| ・伊東あゆみさん、岡村佳代さんが
第3回「未来を築く子育てプロジェクト」を受賞 | | ・第3回 学生と教員でつくる文理融合リベラルアーツ
FD フォーラムを開催 |
| ・西垣結佳子さん、阿隅美保子さんが
日本生活習慣病学会優秀演題賞を受賞 | | ・「図書館総合展/学術情報オープンサミット2009」
のポスターセッションで最優秀賞を受賞 |
| ・半田智子さんが
ソフトウェア科学会のワークショップで受賞 | | ・TeaPot が機関リポジトリ・ランキングにて国内3位 |



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

第2回アフガニスタン復興支援 国際シンポジウムを開催



1月27日、本学で第2回アフガニスタン復興支援国際シンポジウムが開催されました。このシンポジウムは、国際協力機構（JICA）より委託を受けた五女子大学コンソーシアム（お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学）が、アフガニスタンの初等・中等教育分野の女子教育の振興を目的として実施する、アフガニスタン女性教員研修の一環として開催されたものです。

第1部の基調講演では、国際協力機構（JICA）の萱島信子氏から教育援助を中心とした日本の復興支援の現状について、前駐アフガニスタン大使館専門調

査員の岡野恭子氏からはアフガニスタン滞在時の体験談などについてご講演いただきました。

第2部のパネルディスカッションでは、今年度の研修に参加しているアフガニスタンの女性教員と五女子大学の学生をパネリストに、アフガニスタンをはじめとする国際社会への支援がどのようになされるべきかなど、会場からの質問も交え、活発な意見交換がなされました。

また、シンポジウム終了後は、参加者による交流会がおこなわれ、終始笑い声が絶えない楽しいひとときとなりました。



国際協力機構（JICA） 萱島信子氏



前駐アフガニスタン大使館専門調査員
岡野恭子氏



交流会の様子

「現代GPシンポジウム キャリア教育の今、そしてこれから…」を開催 現代GP「科学的思考力と表現力で築く『私の履歴書』」事業

現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）の「実践的総合キャリア教育の推進」として採択された、「科学的思考力と表現力で築く『私の履歴書』」事業の3年間の総括として、「現代GPシンポジウム キャリア教育の今、そしてこれから…」が2月23日に本学で開催されました。シンポジウムの開会挨拶では、羽入佐和子学長及び文部科学省高等教育局専門教育課課長 澤川和宏氏による挨拶がありました。

この現代GPは、学生の職業に対する意識を促し、目的を持った授業カリキュラムの設計、積極的な実行力を身につけることを目的としたプログラムであり、本学では、「表現力」と「科学的思考力」の強化をキャリア教育の理念として取り上げ、これら2つの力を伸ばすために、キャリア関連新規授業を開講、さらに、新たな取組として「キャリアレポート放送局」と「キャリアカフェ」を設置しました。

今回のシンポジウムは、第1部に、平成18年度及び平成19年度に「実践的総合キャリア教育の推進」として採択された63大学等の協力により、「現代GPキャリア教育調査」のアンケートを実施した結果を踏まえ、各大学等の同プログラムの特色・機能性をとりまとめた冊子の配付とその発表、これに加え、立命館大学 加藤敏明氏による基調講演「なぜ、今、キャリア教育なのか。原点に立ち返る」の講話が行われました。第2部では、法政大学・一橋大学・筑波大学・お

茶の水女子大学による学生を交えたGP成果発表があり、第3部は「これからのキャリア教育」をテーマに5大学の教員が登壇し、シンポジウム参加者を交えたパネルディスカッションが行われ、参加者のキャリア教育への意識がより高まった場となりました。



羽入佐和子学長



文部科学省高等教育局専門教育課 澤川和宏氏



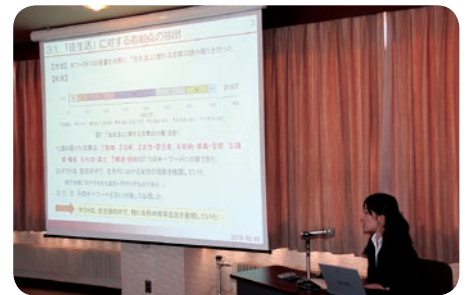
お茶の水女子大学桜蔭会研究奨励賞 受賞者による研究発表会を開催



平成20年度お茶の水女子大学桜蔭会研究奨励賞受賞者による研究発表会が、2月5日、本学にて開催されました。

この発表会は、お茶の水女子大学桜蔭会研究奨励賞によって支援を受けた大学院生が、2年間に渡る研究の成果を発表するというものです。今回は、大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程の東島未知さん、内海しよかさん、小寺貴子さん、安達香里さん、堀辺宏美さんによる研究発表がおこなわれました。

当日は、桜蔭会のみなさまにもご来席いただき、遠藤由美子副会長によるご講評では、学生たちの今後の研究の励みとなるお言葉をいただくことができました。



国際シンポジウム「学生目から見た教育 ～大学が育てる新しいリーダーシップ～」を開催

2009年10月31日、お茶の水女子大学女性リーダー育成プログラムによる国際シンポジウム「学生目から見た教育～大学が育てる新しいリーダーシップ～」が開催されました。

本学学生の司会進行で国際シンポジウムは始まり、近藤譲副学長の開会挨拶の後、女性リーダーを数多く世の中に輩出してきた実績を持つ2つの大学のLorna Duphiney Edmundson 米国ウィルソンカレッジ学長並びに羽入佐和子学長から、長年の教育の実践を振り返り今後の教育のあるべき姿、女子大としての使命についての基調講演が行われました。

さらには、石井クンツ昌子教授（大学院人間文化創成科学研究科）をモデレーターとして、米国ウィルソンカレッジの学生2名及び本学の学生2名から経験に基づいたリーダー教育および教育全般を通して、今後のあるべきリーダー育成教育の方向性についての学生

セッションとパネルディスカッションが行われ、活発な意見交換があり盛会のうちに終了しました。



徽音祭

「JOIN ∞ ACTION ～ Girls be ambitious! ～」

2009年11月7日、8日の2日間にわたって徽音祭が開催されました。

60回目を迎える今年の徽音祭のテーマは「JOIN ∞ ACTION ～ Girls be ambitious! ～」。

お茶大生が憧れるお茶大生No.1を決める「水コン」をはじめ、学生と教員による共同企画「High Quality クイズバトル」、縁日やおもしろ実験のコーナー、模擬講義や受験生相談室など、誰もが楽しめるさまざまな企画が実施され、2日間で1万5千人以上の方々におこしいただきました。



学内でハイチ大地震支援プロジェクトを実施

1月13日にハイチ ポルトープランスで発生した大地震では、死者行方不明者は20万人を上り、被災者は100万人を超えたといわれています。

そのような甚大な自然災害に対して、自分たちに何ができるかを考えた学生数名と教員の有志がハイチ支援プロジェクトを1月に立ち上げました。

本プロジェクトでは、附属図書館のスタッフにも協力をいただき、図書館ラウンジでコーヒーと紅茶のサービスを始めました。一口100円の募金でコーヒーまたは紅茶一杯を提供するという試みです。その売り上げの全額をハイチに寄付することとしました。

1月最終週からの2週間、有志が交代でお昼休みから15時頃までラウンジに立ち、お茶を提供しました。コーヒーの美味しい匂いに誘われて、学生をはじめ、教職員が募金に賛同しました。

募金の総額は、105,942円となり、特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォームに全額寄付されました。

また、募金の一部は、図書館内の自販機のアシード(株)にご協賛いただき、売り上げの1割を寄付していただきました。

(記 グローバル協力センター 高橋)



学生のアクティビティ

学生のアクティビティ

伊東あゆみさん、岡村佳代さんが 第3回「未来を築く子育てプロジェクト」を受賞



大学院人間文化研究科国際日本学専攻の伊東あゆみさん、大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻の岡村佳代さんが第3回「未来を築く子育てプロジェクト」における「女性研究者への支援」事業を受賞しました。

この事業は住友生命保険相互会社が実施する「未来を築く子育てプロジェクト」のひとつで、育児のため研究の継続が困難な女性研究者や子育てをしながら研究を続けている女性研究者などが、研究環境や生活環境を維持・継続するための支援をおこなうというものです。

2月22日に開催された表彰式では、内閣府大臣官房審議官 共生社会政策担当 岡田太造氏、厚生労働省大臣官房審議官 雇用均等雇用・児童家庭、少子化対

策担当 香取照幸氏からも挨拶があり、受賞者の今後の活躍への期待が寄せられました。また、会場には受賞者の子ども達も多く参加し、とても和やかな雰囲気の中での表彰式となりました。



岡田太造氏



香取照幸氏

西垣結佳子さん、阿隅美保子さんが 日本生活習慣病学会優秀演題賞を受賞

大学院人間文化創成科学研究科ライフサイエンス専攻の西垣結佳子さん、阿隅美保子さん（鈴木恵美子教授、曾根博仁筑波大教授共同指導）が、第44回日本生活習慣病学会学術集会において優秀演題賞を受賞しました。

演題名はそれぞれ、「2型糖尿病患者における診療の説明理解度と心理的ストレスの関連」、「無症候性脳梗

塞と血清コレステロール値に関する横断的検討」でした。

日本生活習慣病学会は、昭和45年に日本成人病学会として発足し40年近い歴史を有する学会で、本年度は1月10～11日に東京で開催されました。

半田智子さんがソフトウェア科学会のワークショップで受賞

大学院人間文化創成科学研究科理学専攻情報科学コース博士前期課程の半田智子さんが、2009年12月2日から4日に熱海市で開催された日本ソフトウェア科学会主催の第17回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS2009) において、ソネット賞銅賞を受賞しました。

ソネット賞は WISS2009 における登壇発表・デモ発表中の学生による発表の中から、ソネットエンタテインメント(株)により選出、決定される賞で、79件の発表の中から、金賞、銀賞、銅賞それぞれ1件が選定されました。

受賞論文

半田 智子、神原 啓介、塚田 浩二、椎尾 一郎、なめらカーテン、
第17回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS2009),
日本ソフトウェア科学会研究会資料シリーズ, ISSN
1341-870X, No. 63, pp.179-180, 2009.12.2-4.

第17回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS2009)

<http://www.wiss.org/WISS2009/Awards.html>

藤田彩さん、芦川博美さんが「第7回 航空機による学生無重力実験コンテスト」に採択

宇宙航空開発機構 (JAXA) ((財) 日本宇宙フォーラム宇宙利用事業部) が募集した「第7回航空機による学生無重力実験コンテスト」に本学理学部化学科(森義仁研究室) 藤田彩さん、芦川博美さんが応募した、「結露の表面伝播」のテーマが採択されました。

藤田彩さん、芦川博美さんが提案した実験概要は、微小重力下での結露の表面伝播挙動を観察し、地上との違いを明らかにするというものです。素晴らしい実験成果が得られることを期待しています。

この学生無重力実験コンテストは、日本が参加する国際宇宙ステーション (ISS) 計画に関連して、理工系にとどまらず幅広い分野の学生 (高専生・大学生・大学院生) に無重力実験機会を提供し、宇宙環境利用への理解・関心を深めるとともに、将来の宇宙開発を担うべき人材の育成に寄与することを目的としているものです。

航空機による学生無重力実験コンテスト (JAXA)
<http://iss.jaxa.jp/education/parabolic/index.html>

能見祐理さんが、第19回日本メイラード学会にて若手研究者奨励賞を受賞

大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程ライフサイエンス専攻食品栄養科学領域の能見祐理さんが、11月20日～21日に金沢市で開催された第19回日本メイラード学会にて若手研究者奨励賞を受賞しました。

発表タイトルは、「Xylose-lysine 系のメイラード反応から生成する新規低分子化合物とその類縁体」です。

日本メイラード学会 (JMARS) は、国際的にメイラー

ド反応に関する研究領域で最も古い学会であり、医学・薬学・食品・農学等のメイラード反応の研究者が一堂に会し、多面性を示すメイラード反応に関して多面から討論して情報交換し、日本のメイラード反応研究の中心的な役割を担う学会として位置付けられています。

日本メイラード学会 (JMARS)
<http://www.maillard.umin.jp/>

学生のアクティビティ

教員紹介

日本美術史 —— 関心を培い、文化を比較し、知の地平を広げる

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。今回は比較日本学教育研究センター専門教員の
ロール・シュワルツ＝アレナレス先生にお話を伺います。



Laure Schwartz-Arenales
ロール・シュワルツ＝アレナレス

お茶の水女子大学と 外国人研究者の間の架け橋に

Q. ご出身は？ご専門は？

A. 生まれも育ちもフランスです。専門は美術史とミュゼオロジーですが、中でも日本美術史、特に仏画、そして主に欧米の美術館所蔵のコレクション分析を通して見る、西洋における日本美術の歴史という二つのテーマに携わってきました。

Q. フランスの方が日本美術史を研究されるようになったきっかけは？

A. 私の大叔父はフランス国営電気会社に勤めていたのですが、中国や韓国、日本に出張した際、多くの美術品を集めていました。大叔父は私が生まれた

年に亡くなったのですが、残された収集品を見て育った私は、子どもの頃からそうした東洋の絵画にとっても惹かれていました。花鳥画・水墨画などいろいろありましたが、その色づかいに感動し、見たことのない日本の風景を想像しながら育ちました。パリのエコール・ド・ルーヴル（ルーヴル美術館附属の大学・大学院）に入学し、極東美術史を専攻したのも、こうした体験があったからだと思います。大学院修了後は、フランス国立ギメ東洋美術館で学芸員補佐として働きました。仏像や浮世絵等のコレクションの整理、展覧会の準備、日本から来た研究者の調査の手伝い、資料の電子化の作業など、ほんとうにいろいろな仕事をしました。ギメ美術館日本部門で過ごした4年間、

日々美術品に直に触れながら、極東美術とイコノグラフィーの知識を深めるだけでなく、エコール・ド・ルーヴル時代に始めた、ジャポニズムを背景としたギメ美術館の主要コレクションの誕生についての研究も進めることができました。こうした実務と、また日欧の多くの研究者や美術品修復士との交流が、私にとって大きな財産になっていると思います。その後ソルボンヌ・パリ第4大学の大学院に入学し、フランスにおける日本美術普及の第一人者、秋山光和先生の後押しで、博士課程在籍中に東北大学の大学院に留学しました。フランスには仏画の専門家がいなかったため、東北大の仏画研究者、有賀祥隆先生との出会いは、ほんとうに貴重でした。そこで日本の最も古い涅槃図である「応徳涅槃図」（1086年制作）を研究テーマとして選び、仏画における山水の意味について研究し、パリに戻ってから博士の学位を取得しました。その後は東北大学や京都国立博物館の研究員を勤め、2004年からお茶の水女子大学で勤務しています。

Q. 幼い頃から想像をふくらませていらした日本の風景は？

A. 初めて来日したのは25歳のときです。ギメ美術館で働いていたときのことですが、倉庫に収蔵され忘れ去られていたある仏像が、脚光を浴びることになりました。それがどのようにしてフランスに来たのかは不明なのですが、偉大な日本学者であるベルナル・フランクによって、これが長いこと行方不明であった法隆寺金堂の勢至菩薩像である可能性が高い、との調査結果が出たのです。この勢至菩薩像（1231年制作）を、国宝法隆寺展

のためにいったん日本に送り、再びフランスに連れ戻す仕事のために、私は初めて日本の土を踏みました。ちょうど11月で奈良は紅葉の盛り。その美しさや古寺のたたずまいの雰囲気、仏像の周りで働く方々の熱心さ、などに感動しました。また必ず日本に来よう、「ぜひまた日本に来させてください」と勢至菩薩にお祈りしました。私は今こうして、自分の夢を果たしているのですから、勢至菩薩が私を日本に導いてくれたのだと思っています。

Q. 仏画、それも仏画中の山水をテーマに選ばれたのは、なぜ？

A. 仏画の研究も山水画の研究も、既にたくさん行われていましたが、仏画における山水の研究はほとんどなく、それでその関係性を知りたいと思いました。キリスト教絵画のイコンなどと比較したい気持ちも最初はありましたが、そういうシンボリックなものとはまた異なることが、研究対象を一つに絞ることによって、だんだんわかってきました。私が仏画に惹かれるのは、まずその色調です。絹地の裏からも表からも描きこんでいく技法のすばらしさ、金や銀を用いながら、絹地に染み渡ったような穏やかな色調のみごたさは、西洋はもちろん、日本にもまだ十分に知られていません。私の研究は2008年に鹿島美術財団賞を受賞し、日本からの評価もいただきましたが、こうした日本の古い技巧のすばらしさが、もっともっと知られてほしいと願っています。私は仏像よりも仏画が好きなのですが、それがなぜかは説明できません。仏画は図像的興味、知的興味の対象ではありますが、何よりもその奥にある精神性と美学が、私を惹きつけるのだと思います。フランスには仏教思想そのものの研究の伝統はありましたので、フランスではそうした勉強はしていました。日本に来て古い資料を読んだり、経典を読んだりし、それが次第にフランス

での勉強にリンクしていきました。やはり日本に来なければ、この研究はできなかったと思います。

Q. お子様が生まれたばかりですよね

A. 上の娘は4歳になります。下の息子は去年の4月に生まれました。二人とも日本生まれです。フランス語の幼稚園、日本語の保育園の両方にお世話になっていきますので、日本語もフランス語も話します。今のところ子どもたちにとって、日本は生活の場、フランスはバカンスに行くところ。どちらの国も大好きです。夫は専門は全く別分野ですが、私と同じで日本の美術が大好きですよ。

Q. お茶の水女子大学と学生について、ご感想を

A. お茶の水女子大学では、比較日本学教育研究センターの仕事として、様々なイベントの企画に携わっています。国際日本学シンポジウム・講演会・研究者同士の交流のコーディネイトなどです。中でも、研究仲間の支えもあって、お茶の水女子大学と欧米の著名な研究施設の間で、人文科学だけでなく理系の分野においても、画期的な学術交流や大学間協定を確立できたことは、とても嬉しいことです。日本学という分野でのこうした交流を、内容だけでなく方法的にもさらに発展させながら、今後はさらに広く、他のあらゆる分野に携わる教員、学生にとっての国際交流の架け橋となるよう、努めていきたいと思っています。私は哲学、数学、生物学など様々な分野の研究者に囲まれて育ちました。そのような私が、日本でこうした仕事ができることはとても有意義なことだと感じますし、とても幸せに思っています。お茶大は理想的な環境で、大好きです。学生に対しては、欧米における日本学の誕生とその発展についての授業をしています。ワー



クショップのような形でしていますが、学生はとても真面目で好奇心旺盛、他者との交流の難しさに十分配慮しながら、おもしろい質問をしてくれます。授業を通して学生・教師ともにちょっと変化するような、そんな授業です。

Q. お茶大生へのメッセージをお願いします

A. 自分がちゃんと勉強したことを外国人に伝える、ということをしてほしいと思います。日本には外国人に知られていないことがたくさんあります。私も定期的にフランスに戻りますが、近年日本食レストランがたいへん増えており、日本学者や日本愛好家だけでなく、一般の人々も関心をもつようになってきているのに驚かされます。欧米にとって日本の存在は、とても大きくなっています。こうした今であるからこそ、ぜひ日本を伝えてほしい。みなさんはお茶の水女子大学で学んだからこそ、ステレオタイプでない日本を伝えることができると思います。自身の専門を説明すること、そしてその際、比較という方法論も視野に入れること、そんなことを考えてほしいと思っています。日本と西洋の研究者では、研究テーマが同じであっても、その方法論やアプローチの仕方は違うものです。自分の研究テーマの垣根を越え、学際的、あるいは国際的な視野で研究領域を広げていってください。

教員紹介

日本美術史 —— 関心を培い、文化を比較し、知の地平を広げる

キャンパス点描

「国際規格のFD 戦略」 事業

「Faculty Developmentのための教育・研究・サービス活動業績記録 (アカデミック・ポートフォリオ) の作成術」 セミナーを開催

お茶の水女子大学では、特別教育研究経費で採択され、国際規格のFD 戦略事業の一環として「Faculty Developmentのための教育・研究・サービス活動業績記録 (アカデミック・ポートフォリオ) の作成術」を1月5、7日の2日間、国際的に著名なFDの専門家であるピーター・セルディン氏とJ.エリザベス・ミラー氏を米国から招聘し開催しました。これは、同大学の教育目標である「幅広い基礎教養 (リベラルアーツ) と高度な専門性を身に付けた女性リーダーの育成」に沿った教育の質を保証するため、国際的に通用する教育能力の向上 (国際規格のFD) を目的としています。近年、アメリカお

よび他の多くの国々の高等教育界において、教員は自分の職務業績について説明責任を負うようになり、このアカデミック・ポートフォリオの効果的な作成方法を含む、高等教育の問題に関するコンサルタントをピーター・セルディン氏は全米および世界 45 カ国の 350 を超える大学で努めてきたFDの専門家です。

今回のセミナーは、第1部 研究・サービス活動業績記録の作成方法、第2部 教育活動業績記録の作成方法と教育改善活動のワークショップ・講演の2部構成で2日間にわたって行われ、他大学教職員等も含め延べ 130 名が参加しました。



ピーター・セルディン氏



J.エリザベス・ミラー氏

21世紀型文理融合リベラルアーツの創生と展開事業

第3回学生と教員でつくる文理融合リベラルアーツ

FDフォーラムを開催

1月20日、「第3回学生と教員でつくる文理融合リベラルアーツFDフォーラム」が開催されました。2008年度より開始された「21世紀型文理融合リベラルアーツ科目群」について、今年度は5系列すべての授業が開講されたことをうけて、実際に授業を受講した学生に意見・感想、そして提案を述べてもらい、同時に系列代表の教員から、科目群の提供目的などを明確に提示しようという試みです。登壇した9名の学生たちは、それぞれ、配付資料やPPT資料を駆使しながら、自分の受講体験とそこから得たもの、一方でこの科目群の問題点や課題等について、具体的な発言を行いました。

5系列代表の教員による説明のあと、学生・教員間での質疑応答や討論が行われました。学生からは、時間

割や開講期など、運用上の問題についての指摘に加え、系列として受講することの意義が不明瞭といった今後の課題が示唆される一方、ふだんは同席することの少ない文系・理系の学生が同じ科目を受講することで、相互のインタラクションが生まれ、そのことによって新しい発見や考察の方法を得ることができた、という本科目群の意義が述べられました。本科目群の目的のひとつは、自ら考察を深めそれを発信する能力を養うことですが、登壇してくれた学生たちの姿それ自体が、本科目群の成果を証するものであったと言えます。来年度から本科目群は第二ステージに入りますが、今回の討論を生かし、さらに学生たちにとって魅力ある授業になるよう、努力が重ねられることでしょう。

「図書館総合展／学術情報オープンサミット2009」の ポスターセッションで最優秀賞を受賞

お茶の水女子大学附属図書館は、2009年11月10日～12日にパシフィコ横浜を会場として開催された「第11回図書館総合展／学術情報オープンサミット2009」（3日間の来場者数24,500人）のポスターセッションに参加しました。

今回のポスターセッションには、団体、個人を含めて、約50点が出展されていましたが、会期中の来場者投票による集計の結果、お茶の水女子大学附属図書館のポスター『壁を壊した図書館 ～お茶大図書館活性化のヒ・ミ・ツ～』が、最優秀賞に選ばれました。

●「壁を壊した図書館 ～お茶大図書館活性化のヒ・ミ・ツ～」
お茶大図書館が「壁を壊して」作ったのは、ラーニング・commonsやカフェだけではありません。

前例や体制の壁など様々な「壁を蹴飛ばして」、学生ILLの無料化、学生協働のLiSA インターンシッププログラムなど、次々と新たなことにチャレンジしています。

利用者の気持ちにいちばん敏感なのは、現場に立つスタッフです。

全てのスタッフが利用者の気持ちに敏感になること。スタッフが元気で前向きであること。やってみたいと思ったことにすばやく、楽しく取り組めること。それが「壁を壊した」お茶大図書館活性化のいちばんのポイントです。

今回のポスターでは、そんなスタッフたち、それぞれの「私の自慢」にご注目ください



ポスターセッションで紹介されたポスターはこちら

http://www.lib.ocha.ac.jp/topics/2009/toshokan_sougouten_091116.html

TeaPot が機関リポジトリ・ランキングにて国内3位（世界52位）

本学の機関リポジトリ (TeaPot) が、スペインの研究機関 Consejo Superior de Investigaciones Científicas (CSIC) が発表した世界のリポジトリ・ランキング (2009年7月) にて、国内で3位 (世界で52位) となりました。

このランキングは、CSIC が Open Access の促進をサポートするために行っているもので、検索エンジンによる評価やリポジトリへの外部リンク数など4つの項目により順位を決定しています。本学は、検索エンジンでの HIT 数や登録してある PDF ファイル数が評価され、

国内では京都大学、九州大学に続く第3位、世界で52位となりました。

TeaPot の登録件数は日々増加しています。皆様のご活用をお待ちしております。

TeaPot

<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

キャンパス点描



表紙 第60回徽音祭
裏表紙 平成22年度学部入試(前期)

お茶の水女子大学学报 第223号
▽発行日：2010年3月23日
▽発行：国立大学法人お茶の水女子大学
東京都文京区大塚2-1-1 (〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで
学術・情報機構広報チーム
電話 03-5978-5105
FAX 03-5978-5545
E-mail : info@cc.ocha.ac.jp
URL : http://www.ocha.ac.jp/